

○或ウタガフ。疑ふ。○王、齊王。○易生之物、草木につきていふ。○暴アタ、ム。温む。「曝」の本字。日光もて温めること。○寒ヒヤス。冷す。○見マミニ。王に進見すること。○罕マレ。稀。○萌キザス。萌芽。良心の芽生え。

孟子がいふには、「齊王の不智であることは疑ふ餘地はない。蓋し人君たる者の心は、之を養ふところ如何にあるのみ。之を養ふに義理を以てすると、其の智は明らかに、之を誘ふに物慾を以てすると、其の智は昏いのである。今假りに天下に生じ易い種子があつたにしても、播種後、一日之を温めて、十日之を冷したとしたら、よく生長するものはないのである。同様に自分が齊王に進見することは稀で、王の良心をひらくことは深くない。そして一度御前を退下すると、左右の群小が進んで王を不善に導くのである。斯様な有様では、わが進見の際義理を以て王の心を温め、王の善心の萌芽を見出ししても、小人共が之を覆して仕舞ふ。これでは自分は何ともすることは出来ないのである。」と。

(一二五) 微、楠氏、則西狩之駕、吾見其與承久歸一轍而止而已。何哉。彼北條氏、雖失於政、其權力有更甚焉。藉累世之威、而加積弱之餘、百萬虎狼、隨其指呼、咆咻中國、莫之或撓。天下方以承久爲戒、重踵屏息、莫敢言勤王之事。

(日本外史)

微、楠氏、則西狩之駕、吾見其與承久歸一轍而止而已。何哉。彼北條氏、雖失於政、其權力有更甚焉。藉累世之威、而加積弱之餘、百萬虎狼、隨其指呼、咆咻中國、莫之或撓。天下方以承久爲戒、重踵屏息、莫敢言勤王之事。

○微、ナカリセバ。假定の否定。○西狩之駕、「西」は西國。「狩」は巡狩。元弘の時後醍醐帝が西國隱岐にお徙り遊ばされたことをいふ。○承久、承久の亂。○歸一轍、「前」と同様になること。「轍」は車の跡。○藉、累世之威、九代も續いた勢力に依ること。○積弱之餘、衰弱の上にも衰弱した後。○虎狼、猛將勇卒の意。○指呼シコ。指揮。○咆咻、ハウキウ。ほこること。○撓フル。觸れる。近づくこと。○或、アリ。有り。○以、承久爲戒、後鳥羽上皇の關東征伐の謀に與れる輩の極刑に處せられた事を以て恐れ戒としてみたこと。○重踵屏息、踵を重ねて立ちすくみ、息を殺すこと。恐れる様。

(34)

苦

ネンゴロニ

非

ソシル

(一二六) 西行曰、自棄以來、家世所傳、亦已散亡。今乃風月之外、都無所記。然亦不甚拒、爲公談兵一夕、乃且將出、公苦留不可。乃出銀猫爲贈、行受而出門。

苦・非

三七一

前見兒嬉使與之去。(東大農實)

西行曰。自棄以來。家世所傳。亦已散亡。今乃風月之外。都無所記。然亦不甚拒。爲公談。兵一夕。乃且將出。公苦留。不可。乃出銀猫。爲贈。行受而出。門前見兒嬉。便與之去。

語釋 ◎西行 圓位と號す。俗名は佐藤義清、鳥羽上皇に奉仕した北面の武士。◎自棄 自ら世を棄てる。遁世。

◎散亡 散逸して亡ぶ。◎風月 風流の道。◎都スベテ 皆の意。◎記 記憶する。◎公 頼朝。◎苦ネン

ロゴ。丁寧に。◎不可 聞き入れぬ。承諾せぬ。◎嬉 たはむれる。◎便 スナハチ。たやすく。

(一二七) 今陛下并有天下。辨白黑而定一尊。而私學乃相與非法教教制。聞

令下。即各以其私學議之。入則心非。出則巷議。非主以爲名。異趣以爲高。率羣

下以造謗。如此不禁。則主勢降乎上。黨與成乎下。(李斯)

今陛下并有天下。辨白黑而定一尊。而私學乃相與非法教教制。聞令下。即各以其

私學議之。入則心非。出則巷議。非主以爲名。異趣以爲高。率羣下以造謗。如此不

禁。則主勢降乎上。黨與成乎下。

語釋 ◎辨白黑 是非善惡を辨別する。◎定一尊 帝位に即く。◎非ソシル 心にヒとす。◎非主

主をソシる。◎造 イタス。

(35)

易

ヨサム
カフ

(二二八) 易其田疇。薄其稅斂。民可使富也。食之以時。用之以禮。財不可勝用

也。民非水火不生活。昏暮叩人之門戶。求水火。無弗與者。至足矣。聖人治天下。

使有菽粟。如水火。菽粟如水火。而民焉有不仁者乎。(孟子)

易其田疇。薄其稅斂。民可使富也。食之以時。用之以禮。財不可勝用也。民非水火不

生活。昏暮叩人之門戶。求水火。無弗與者。至足矣。聖人治天下。使有菽粟。如水火。菽

粟如。水火而民焉有不仁者乎。

語釋 ◎易 ヲサム。治む。◎田疇 デンチウ。「田」は稻田。「疇」は麻田。◎稅斂 租稅。「斂」は收む。◎昏暮

コンボ。日暮の意。◎至足矣。水と火とはありあまる程あるからであるの意。◎菽粟 シュクソク。「菽」は豆

類の總稱。「粟」は穀物の類のあるもの。

通釋 其の田地によく手入れさせ、課税を少くしてやると、其の結果民を富ませることが出来る。又時節でない

ものは食はず、禮にはづれぬ程度に物を用ひさせると、財物は用ひ切れぬ程豊富になる。そして民は水と火とがないと、一日も生活することが出来ぬ。爾く大切なものではあるが、日暮に他人の家に行つて水や火を求めると與へぬものはない。それは十二分にあるからである。彼の聖人の天下を治めるには、五穀の豊富なることは恰も水火の如くにしてやる。若し五穀をして水火の如く豊富ならしめると、民自ら仁に趨いて、どうして不仁なるものがあらうか不仁なるものはないのである。

(一二九) 然子厚斥不久。窮不極。雖有出於人。其文學辭章。必不能自力以致。必傳於後世。如今無疑也。雖使子厚得所願。爲將相於一時。以彼易此。孰得孰失。必有能辨之者。(唐宋八家文)

然子厚斥^{ケル}不久^ク。窮^ム不^レ極^ム。雖^モ有^リ出^ル於^テ人^ニ。其^ノ文學^ノ辭^ノ章^ノ。必^ズ不^レ能^ク自^ラ力^ヲ以^テ致^ス。必^ズ傳^ハ於^テ後^ニ世^ニ。如^ク今^ノ無^ク疑^ハ也。雖^モ使^ハ子^ノ厚^ヲ得^ル所^ノ願^ヲ。爲^ル將^ト相^ト於^テ一^ニ時^ニ。以^テ彼^ヲ易^ス此^ヲ。孰^シ得^ル孰^シ失^ル。必^ズ有^リ能^ク辨^ズ之^ル者[。]

◎文學 學問の意。◎辭章 文章。◎得所願 其の念願を達成すること。◎彼 學問文章をいふ。◎易 將相をいふ。

然し子厚が久しい間朝廷から斥けられず、又困窮することも其の極點に達しなかつたならば、如何に人に

擲でた才智があつたと假定しても、其の學問と文章との點に於ては、今日疑ひもなく、後世に傳はると保證されてゐる如きものを作る事に大發憤大努力をすることは、困難であつたかも知れぬ。假りに子厚の念ずる所を達成させて、其の當時に大臣大將の榮位榮職につかしたにしても、彼の學問文章を此の大臣大將ととりかへることは、どちらが得でどちらが損であるか必ずよく之を判知する人があるであらう。

(36)

有

タモツ

要

モトム

造

イタル

(一三〇) 夫以赫赫天朝。祖宗百世之天下。而欲傳之一比丘。誰不知其不可。而莫敢言者何哉。曰。懼禍也。當此時有一人焉言之。是捐其一身以存祖宗之天下也。清麻呂是已。故曰。士之氣節關係天下國家者。不可不養。此以爲倚賴也。(日本政記)

夫^レ以^テ赫^々天^ノ朝^ノ。祖^ノ宗^ノ百^ニ世^ノ之^ノ天^ノ下^ヲ。而^{シテ}欲^シ傳^ハ一^ニ比^ニ丘^ニ。誰^カ不^レ知^ル其^ノ不^レ可^ク。而^{シテ}莫^ク敢^テ言^フ者[。]何^レ哉[。]曰^ク。懼^ル禍^ヲ也。當^ル此^ノ時^ニ。有^リ一^ニ人^ニ焉[。]言^フ之^ヲ。是^レ捐^テ其^ノ一^ニ身^ヲ以^テ存^ス祖^ノ宗^ノ之^ノ天^ノ下^ヲ也。清^ノ麻^ノ呂[。]是^レ已[。]故^ニ曰^ク。士^ノ之^ノ氣^ノ節[。]關^ス係^ス天^ノ下^ノ國^ノ家[。]者[。]不^レ可^ク不^レ養^フ。此^ヲ以^テ爲^ス倚^ル賴^ト也。

○赫赫 太陽の光り輝く様。○天朝 朝廷。○比丘 ビク。僧侶。梵語の物を乞ふ義。○捐 スツ。棄てる。○存 存續。○氣節 氣概。節操。○有タモツ。保有する。

(一三二) 信玄居常略涉書志嘗以孫子語書其旗曰不動如山。侵掠如火。其靜如林。其疾如風。馬場信房問曰。雖疾哉。非倏走倏止者乎。信玄曰。兵鋒貴疾耳。苟止矣。則吾以麾下繼之。信房曰。君要第二合之勝也。其君臣講究武事。皆此類也。(日本外史)

信玄居常略涉書志嘗以孫子語書其旗曰不動如山。侵掠如火。其靜如林。其疾如風。馬場信房問曰。雖疾哉。非倏走倏止者乎。信玄曰。兵鋒貴疾耳。苟止矣。則吾以麾下繼之。信房曰。君要第二合之勝也。其君臣講究武事。皆此類也。

○居常 平素。○涉ワタル。涉獵。廣く讀書すること。○孫子 齊の孫武の著。兵法の書、十三卷十三篇あり。其の語は軍事篇に見ゆ。○侵掠 敵地を侵し掠ること。○風雖疾哉 此の「哉」は「乎」に等し。「倏」忽也。○兵鋒 兵の鋒先。○麾下 キカ。本營旗下の兵。○第二合 第二回目。○要モトム。要望 要求。

(一三三) 君子之學。必日新。日新者日進也。不日新者必日退。未有不進而不退者。唯聖人之

退者。唯聖人之道。無所進退。以其所造者極也。(近思錄)(富山高等)

君子之學。必日新。日新者日進也。不日新者必日退。未有不進而不退者。唯聖人之道。無所進退。以其所造者極也。

○新 新しい方面を學習する。○造 イタル。到る。○極 極點の意。至極。

(37) 底

イタス
イタル

干

モトム

(一三三) 天地之養人也。將無厚乎。特人自薄之耳。豈特薄之而已哉。將且絶之。人有不克爲生。自底凍餒。而曰。天地不我養者。是謂誣天地罪莫大焉。(松江高等)

天地之養人也。將無厚乎。特人自薄之耳。豈特薄之而已也。將且絶之。人有不克爲生。自底凍餒。而曰。天地不我養者。是謂誣天地罪莫大焉。

○不克 アタハズ。「不能」に同じ。○生 生活。○凍餒 トウタイ。凍えると餓ゑると。○克 能ふ。○底 イタス。至也。○誣 シフ。無いことを有るやうにいひ、又有を無に言ひなすこと。

(一三四) 及項梁渡淮信杖劍從之居戲下無所知名項梁敗又屬項羽羽以爲郎中數以策干項羽羽不用漢王之入蜀信亡楚歸漢未得知名爲連敖坐法當斬其輩十三人皆已斬次至信信乃仰視適見滕公曰上不欲就天下乎何爲斬壯士滕公奇其言壯其貌釋而不斬(史記)

及項梁渡淮信杖劍從之居戲下無所知名項梁敗又屬項羽羽以爲郎中數以策干項羽羽不用漢王之入蜀信亡楚歸漢未得知名爲連敖坐法當斬其輩十三人皆已斬次至信信乃仰視適見滕公曰上不欲就天下乎何爲斬壯士滕公奇其言壯其貌釋而不斬

◎淮ワキ。河の名。◎戲下キカ。「麾下」に同じく、大將に直屬する者、即ちはたもとをいふ。◎干モトム。用ひられん事を願ふ。◎連敖。楚の官名で司馬。◎坐法。國法を犯すこと。◎次。順番。◎就天下。天下の大業を成すこと。

(一三五) 呂榮公自少官守處未嘗干人舉薦其子舜從守官會稽人或譏其不求知者舜從對曰勤於職事其他不敢不慎乃所以求知也(弘前高等)

呂榮公自少官守處未嘗干人舉薦其子舜從守官會稽人或譏其不求知者舜從對曰勤於職事其他不敢不慎乃所以求知也

◎官守。官職。◎舉薦。キヨセン。あげすゝめる。◎干。モトム。望む。◎守。長官。

(38) 上 タフトブ 較 ハカル ヤ

(一三六) 魯仲連曰世以鮑焦爲無從頌而死者皆非也衆人不知爲一身彼秦者棄禮義而上首功之國也權使其士虜使其民彼即肆然而爲帝過而爲政於天下則連有蹈東海而死耳吾不忍爲之民也(史記)

魯仲連曰世以鮑焦爲無從頌而死者皆非也衆人不知爲一身彼秦者棄禮義而上首功之國也權使其士虜使其民彼即肆然而爲帝過而爲政於天下則連有蹈東海而死耳吾不忍爲之民也

◎鮑焦。ハウセウ。周代の隱者。◎從頌。シヨウシヨウ。平然として落着く様。從容に同じ。◎衆人不知。世人は鮑焦が當時の世道人心を矯めんとせしことを知らないの意。◎上。タフトブ。尊ぶ。◎首功。敵の首を

斬ることを功とする。◎權使 詐り使ふこと。◎虜使 捕虜扱ひにすること。◎肆然 シゼン。我儘な様。

通釋 魯仲連がいふ、「世人は鮑焦が周章でて死んだのであるとしてゐるのは何れも間違つてゐる。又世人は彼の眞精神を知らずに一身の爲に死んだのであるとしてゐる。一體かの秦は、禮儀をすてて敵の首を多くとるのを尊ぶ國である。そして其の士を詐り使ひ其の民を捕虜の如くに酷使してゐる。斯く暴虐な秦が肆然として帝となり、過つて天下の政をなさば、吾(連)は東海に赴き死するより致方がない。自分は秦の民たることは忍ばれないのである。」と。

(一三七) 心不通於道而較古人之是非。猶不持權衡而酌輕重。竭其目力。勞其心智。雖使時中。亦古人所謂億。則屢中。君子不貴也。(近思錄)

心不通於道而較古人之是非。猶不持權衡而酌輕重。竭其目力。勞其心智。雖使時中。亦古人所謂億。則屢中。君子不貴也。

通釋 ◎較、ハカル。論評比較する。◎權衡、ケンカウ。はかりの意。「權」は秤のおもり、「衡」は秤のさほ。◎酌、計ること。◎目力、眼力。◎勞、つからせる。◎時中、トキニアタル。時たまあたること。◎億、オモンバカル。心により計り考へること。

通釋 心に物事の道理を明らかに理解して居らずに、古人の言行の善惡正邪を比較論評することは、丁度ばかり

を持たずに、物の輕重をはかるやうなものだ。決して其の正しきを得るものではない。しかし其の眼力をつくし、其の心智をはたらかせて、時たま的中することがあるやうに、時にはかることが出来たとしても、矢張り古人のいつた、道理に根據を置かずに、思ひはかつて見ると、たび／＼中るものであるといふやうなものである。之は道理によつて中てたものではないから、君子は之を貴ばないのである。

(39) 女 ナンヂ 而 ナンヂ

(一三八) 子游爲武城宰。子曰。女得人焉耳乎。曰。有澹臺滅明者。行不由經。非公事。未嘗至於之室也。

子游爲武城宰。子曰。女得人焉耳乎。曰。有澹臺滅明者。行不由經。非公事。未嘗至於之室也。

通釋 ◎武城宰、武城は魯の邑名。宰は代官。◎女、汝。◎人、立派な人物の意。◎澹臺滅明、タンダイメツメイ。「澹臺」は姓、「滅明」は名、字を子羽といひ、孔子の弟子、德行の人であつた。◎徑、ケイ。小さな路。◎公事、郷飲酒・郷射などを行ふときは、屬吏は邑宰の室に至りて種々の手傳をなすのである。◎偃、エン。子

游の名

【通釋】 子游が武城の代官となつた。そこで孔子が、政を行ふには人才を要すから、「汝は人物を見出したか。」と問うた。子游は、「滌寨滅明といふ者があります。此の人は決して近道をする爲に小路は通らないし、又公事でない以上私の室へも来たことがない程行正しく心に守るところのある立派な人物であります。此の人を得ました。」と答へた。

(一三九) 子謂子貢曰。女與回也。孰愈。對曰。賜也。何敢望回。回也。聞一以知十。賜也。聞一以知二。子曰。弗如也。吾與女弗如也。(論語)

子謂子貢曰。女與回也。孰愈。對曰。賜也。何敢望回。回也。聞一以知十。賜也。聞一以知二。子曰。弗如也。吾與女弗如也。

【通釋】 ①女。汝。②回。孔子の弟子顔回。③愈。マサル。すぐれてゐること。④賜。子貢の名。姓は端木。才を以て名あり。⑤何敢望回。敢て回に比較しよとはしない。⑥與。ユルス。許す。許容する。

【通釋】 孔子が子貢につけていふには、「お前は自らの學び得た點を顔回と比較して何れがまさつてゐると思ふか。」と。子貢が對へていふ、「私はどうして顔回に比較することを望みませう。到底私は顔回と比較にならない程劣つてゐます。回は一を開けば十を知りますが、私は一を聞いて二を知る位のものであります。」と。孔子が

いふ、「如何にもお前のいふやうに、お前は顔回には及ばないのである。吾はお前自らを知つて回に及ばぬといつたことを許さう。」と。

(一四〇) 吳伐越。吳王闔廬傷而死。子夫差立。夫差志復讎。朝夕臥薪中。出入使人呼曰。夫差。而忘越人之殺而父邪。周敬王二十六年。夫差敗越。越王勾踐反國。懸膽於坐臥。即嘗之曰。女忘會稽之恥邪。(十八史略)

吳伐越。吳王闔廬傷而死。子夫差立。夫差志復讎。朝夕臥薪中。出入使人呼曰。夫差。而忘越人之殺而父邪。周敬王二十六年。夫差敗越。越王勾踐反國。懸膽於坐臥。即嘗之曰。女忘會稽之恥邪。

【通釋】 ①而。ナンヂ。汝。②嘗。ナム。なめること。③女。ナンヂ。汝。④會稽之恥。越王勾踐が吳王夫差に會稽山で圍まれて敗れし恥をいふ。

(40)

誅

セム

伐

ホコル

(一四一) 宰予晝寢。子曰。朽木不可雕也。糞土之牆不可朽也。於予何誅。子曰。

誅・伐

始吾於人也。聽其言而信其行。今吾於人也。聽其言而觀其行。於予與改是。

(論語)

宰予晝寢。子曰。朽木不可雕也。糞土之牆不可朽也。於予何誅。子曰。始吾於人也。聽其言而信其行。今吾於人也。聽其言而觀其行。於予與改是。

◎宰予、サイヨ。孔子の弟子、辯口を以て名あり。但し巧辯なれど實行の伴はぬ人。◎晝、ヒルイヌ。晝寢をした。◎雕、エル。彫刻する。◎糞土之牆、フンドのシヨウ。掃き溜の土。◎朽、ヌル。コテ也。コテで美しく上塗りすること。◎於予、予に於テカとよんで、宰予に對してはと解く。◎誅、セム。責む。◎改是、「是」は言を聽いて行を信ずることを受く。

通釋

宰予がある日晝寢をした。學に志す者は寸時を惜しみて勉むべきに晝寢をするとは怠惰の極であるといふので、孔子が之を責めていふには、「朽ちた木には彫刻は出来ないものである。掃き溜の土では上塗りをして美しくすることは出来ないものである。宰予は怠惰な者で、朽ちた木・路傍の乾いた土で作った土塀と同様であるから、予に對してはどうして責めだてしよう。責めても見込みがないのである。私は以前には人に對して、其の言を聞くと其の行爲も一致してしてゐると信じてゐた。然し今からは私は人に對して、其の言を心して聞き、其の行を心して見てから之を信ずることにする。宰予で失敗したから、人に對する態度を改めることにし

たのである。

(一四二) 務言而緩行。雖辯必不聽。多力而伐功。雖勞必不圖。慧者必辯而不

繁說。多力而不伐功。此以名譽揚天下。(八高)
務言而緩行。雖辯必不聽。多力而伐功。雖勞必不圖。慧者必辯而不繁說。多力而不伐功。此以名譽揚天下。

◎言、ものを言ふこと。◎行、實行すること。◎辯、雄辯であること。◎多力、力の多いこと。◎勞、努め勞する。◎不圖、如何程勞するも人から認められぬ意。◎慧者、智慧のある人。◎繁說、言葉數多く説くこと。◎此以、「是以」と同じ。それゆゑに。

(一四三) 子曰。孟之反不伐。奔而殿。將入門。策其馬。曰。非敢後也。馬不進也。

(論語)

子曰。孟之反不伐。奔而殿。將入門。策其馬。曰。非敢後也。馬不進也。

◎孟之反、マウシハン。名は側、魯の大夫。哀公十一年魯と齊と戦つた時、魯軍齊に破れて追はる。孟子反自ら後れて殿となり敵の追撃を防いだ。◎伐、ホコル。功勞に誇ることに。◎奔、敗北して逃げるをいふ。◎殿、殿軍。しんがり。

【通釋】孔子がいふには、「魯の大夫孟之反は功に誇らなかつた人であつた。魯が齊と戦つて敗走した時に、孟之反は自ら殿となつて、敵の追撃を防ぎ、味方を守りつゝ引揚げ、將に魯の城門へ入らうとした時、其の馬に鞭打つて、「自分は敵の追撃を防がう爲に後れたのではない。此の馬が進まなかつたから後れたのである。」といつて、少しも己が功を誇らなかつた。」と。

(41)

惡

ニクム

(一四四) 子貢問曰。郷人皆好之何如。子曰。未可也。郷人皆惡之何如。子曰。未可也。不如郷人之善者好之。其不善者惡之。(論語)

子貢問曰。郷人皆好之何如。子曰。未可也。郷人皆惡之何如。子曰。未可也。不如郷人之善者好之。其不善者惡之。

【通釋】◎郷人皆好之、一郷の人が皆之を善いとする意。◎惡ニクム。憎惡する。◎未可、郷人の誰にもほめられる者、或は心に徳のない偽善的人であるかも知れぬ。又郷人から惡まれる人は、惡人からも善人からも共に憎まれるものである。故にほむべき人ではない。されば夫子は兩者共に「未可」といつたのである。◎不

善者、善くない者。

【通釋】子貢が孔子に尋ねていふには、「一郷の人全部が之を好みほめたならば、賢人といはれませうか、どうでせうか。」と。孔子がいふ、「まだそれだけではいけない。」と。そこで子貢がいふ、「然らば一郷の者が皆之を惡むとしたなら、賢人といはれませうか、どうでせうか。」と。孔子がいふには、「まだ賢人とする事は出来ぬ。それよりは、郷人の中の善い者が之をほめ、郷人の中の惡い者が之を惡むやうな人を賢人とするのがよいのである。」と。

(一四五) 子路使子羔爲費宰。子曰。賊夫人之子。子路曰。有民人焉。有社稷焉。何必讀書然後爲學。子曰。是故惡夫佞者。(論語)

子路使子羔爲費宰。子曰。賊夫人之子。子路曰。有民人焉。有社稷焉。何必讀書然後爲學。子曰。是故惡夫佞者。

【通釋】◎子羔シコウ。才學の未完成の人であつた。◎費、魯の大臣季氏の私邑で、數叛きし強邑で中々治めるに困難であつた。◎人之子、年少者の稱、子羔をさす。◎賊ソコナフ。害ふ。◎民人、人民。◎惡夫佞者、子路が自己の非をかざるのを惡んで、故に辯口の上手な者は嫌ひである意。

【通釋】子路が季氏の家臣であつた時子羔を薦めて費の宰とした。孔子が、「彼の未熟の子羔を此の任につけたこ

とは、却つて子羔を害ひ、其の身を全うする所以の道ではないと思ふ。」といった。そこで子路が、「それは彼の學が未熟なのによるのでせう。然し費にも治むべき人民があり、事ふべき社稷がある。是等の實際に従つて習ふのは學問する所以と思ふ。どうして必ずしも書物を読むばかりが學問だといはれよう。」といった。孔子は、「だからかの口先上手な者は嫌ふのだ。」といった。

(42)

居

オク

集

ナル

(一四六) 夫養騏驥者。豐其芻粒。潔其羈絡。居之新閑。浴之清泉。而後責之千里。彼騏驥者。其志常在千里也。夫豈以一飽而廢其志哉。(唐宋八家文)

夫養騏驥者。豐其芻粒。潔其羈絡。居之新閑。浴之清泉。而後責之千里。彼騏驥者。其志常在千里也。夫豈以一飽而廢其志哉。

騏驥、キキ。千里を走る駿馬。芻、スウリフ。馬糧。粒は穀類をいふ。羈絡、キラク。綱をいふ。居、オク。置く。新閑、新しいうまや。責、之千里。馬に千里を駈けさせる。夫、豈、以、一飽、云云。元來駿馬は、其の志は何時も千里を駈けるにあるのだ。故に腹一杯に物食ひ飽きたからとて、どうして其

の初志を廢したりしようか、廢することはない。

(一四七) 假令韓信學道。謙讓不伐。己功不矜。其能則庶幾哉。於漢家勳。可以比周召太公之徒。後世血食矣。不務出此。而天下已集。乃謀畔逆。夷滅宗族。不亦宜乎。(史記)(長崎高商・富山高等)

假令韓信學道。謙讓不伐。己功不矜。其能則庶幾哉。於漢家勳。可以比周召太公之徒。後世血食矣。不務出此。而天下已集。乃謀畔逆。夷滅宗族。不亦宜乎。

假令、モシ。假定の辭。謙讓、謙遜辭讓。伐、ホコル。「矜」と同じく自慢する。能、才腕。庶幾、チカシ。近し。周召太公、周初の功臣、周公旦・召公奭・太公望呂尙をいふ。血食、ケツシヨク。祭られる。毛血のある犠牲を供へて祭る意。集、ナル。成る。成就。畔逆、「畔」も「逆」もそむく。夷滅、イメツ。「夷」は平、平げ滅ぼされる。

逆釋 若し韓信が道徳を學び、謙遜して自分の手柄や才能を鼻にかけることがなかつたら、漢の朝廷に對してたてた勳功は、恐らくは彼の周公・召公・太公望等と肩を比べて何の遜色もなく、子々孫々相傳へて祀の禮遇を受け得たに相違なかつたらう。然るに彼は此の態度に出ることに務めずして、天下が已に統一平定されてから、

そこで叛逆を謀つた。其の一族が平げ滅ぼされたのは、なんと當然なことではないか。

(一四八) 古之聖人非不知深刻之法可以齊衆。勇悍之夫可以集事。忠厚近

於迂濶。老成初若遲鈍。然終不肯以彼而易此者。知其所得小而所喪大也。

古之聖人。非不知深刻之法。可以齊衆。勇悍之夫。可以集事。忠厚近於迂濶。老成初若遲鈍。然終不肯以彼而易此者。知其所得小而所喪大也。

◎齊衆 齊はト、ナフ。深刻の法則を以て、悪人を無くし善人をそろへる。◎集ナス。爲す。◎忠厚 まじめで親切な人。◎老成 老熟した人。◎若ゴトシ。◎彼 深刻の法と勇悍の人。◎此 忠厚の人と老成の人。

(43)

資

タスク
ヨル

(一四九) 經不得史無以證其褒貶。史不得經無以酌其輕重。經非一代之實錄。史非萬世之常法。體不相沿而用實相資焉。

經不得史。無以證其褒貶。史不得經。無以酌其輕重。經非一代之實錄。史非萬世之常法。體不相沿而用實相資焉。

◎體不相沿 體裁は違ふ。◎用實 實際のはたらき。◎資 タスク。

(一五〇) 平氏除重盛之外皆不學無術。其矜功擅寵。進不知止。曷足尤焉。假設重盛後父而死。盡反其所爲。戒飭子弟。輔翼王室。則雖接踵比隆於藤原氏。可也。而源氏何資以起哉。

平氏除重盛之外。皆不學無術。其矜功擅寵。進不知止。曷足尤焉。假設重盛後父而死。盡反其所爲。戒飭子弟。輔翼王室。則雖接踵比隆於藤原氏。可也。而源氏何資以起哉。

◎矜 ホコル。◎曷 イヅクンゾ。◎尤 トガム。◎假設 モシ。◎戒飭 カイチヨク。戒めたす。◎接踵 比隆於藤原氏。藤原氏について隆盛を極める。◎資 ヨル。

(44)

常

カツテ

嘗

ツネニ

須

モチフ
マツ

(一五一) 後漢許邵。少峻名節。好人倫。多所賞識。時郭太亦知人。故天下言拔士者。稱許郭。曹操微時。常卑辭厚禮。求爲己目。邵鄙其人。曰。君清平之姦賊。亂世之英雄。操大悅而去。

後漢、許邵、少峻、名節、好、人倫、多、所賞識、時郭太亦知人。故天下言拔士者、稱許郭。曹操微時、常卑辭厚禮、求爲己目。邵鄙其人、曰、君清平之姦賊、亂世之英雄、操大悅而去。

◎許邵 キヨセウ。◎峻 タカシ。◎人倫 人の履むべき道、人たる道。五倫、五常。◎拔士 人材を拔擢する。◎微 微賤。◎常カツテ。嘗。◎目 モク。輔佐。◎清平 世がよく治まつて静かなこと。

(一五二) 夫事不患於不成。而患於易壞。蓋作者未始不欲其久存。而繼者嘗至於怠廢。始作之心。則民到於今。受其賜。天下豈有遺利乎。(唐宋八家文)

夫事不患於不成。而患於易壞。蓋作者未始不欲其久存。而繼者嘗至於怠廢。始作之心。則民到於今。受其賜。天下豈有遺利乎。

◎壞 ヤブル。◎捍 フセグ。◎遺利 キリ。とりのこされた利益、人のすておいた設け。

(一五三) 余嘗遊長崎。觀蘭船。儼然如一城壁。四圍皆銅。上植三柱。繫帆數十片。隨風而轉之。順逆皆進。船腹穿孔。以置巨砲數門。有變輒發。百司衆職及所須服食之物。莫不皆備。

余嘗遊長崎。觀蘭船。儼然如一城壁。四圍皆銅。上植三柱。繫帆數十片。隨風而轉之。順逆皆進。船腹穿孔。以置巨砲數門。有變輒發。百司衆職及所須服食之物。莫不皆備。

◎植 タツ。◎須 モチフ。

(一五四) 卞莊子欲刺虎。館豎子止之。曰。兩虎方且食牛。食甘必爭。爭則必鬪。鬪則大者傷。小者死。從傷而刺之。一舉必有雙虎之名。卞莊子以爲然。立須之。

有頃。兩虎果鬪。大者傷。小者死。莊子從傷者而刺之。一舉果有雙虎之功。下莊子欲刺虎。館豎子止之。曰。兩虎方且食牛。食甘必爭。爭則必鬪。鬪則大者傷。小者死。從傷而刺之。一舉必有雙虎之名。下莊子以爲然。立須之。有頃。兩虎果鬪。大者傷。小者死。莊子從傷者而刺之。一舉果有雙虎之功。

◎傷 キズツク。◎從 傷 負傷して居るのにつけ込んで。◎須 マツ。

(45)

良 ヤ、マコトニ 第 タ、 劣 ヤ、

(一五五) 廷尉天下之平也。一傾而天下用法皆爲輕重。民安所錯其手足。唯陛下察之。良久。帝曰。廷尉之當是也。

廷尉 天下之平也。一傾而天下用法皆爲輕重。民安所錯其手足。唯陛下察之。良久。帝曰。廷尉之當是也。

◎廷尉 司法大臣に當る。◎天下之平 天下の公平を保つ者。◎一傾而云々 一度廷尉自身が法を曲げて用ひたならば、天下の裁判官は皆勝手に軽くも重くもする。◎民安所錯其手足 民はどうして安心して居ら

れようぞ。錯は措と同じ。◎良 ヤ、。◎當 處置。◎是 ぜ、よい。

(一五六) 曹操一日從容謂劉備曰。今天下英雄。唯使君與操耳。備方食。失匕筋。值雷震。詭曰。聖人云。迅雷風烈必變。良有以也。

曹操 一日從容謂劉備曰。今天下英雄。唯使君與操耳。備方食。失匕筋。值雷震。詭曰。聖人云。迅雷風烈必變。良有以也。

◎使君 あなた。尊公。◎匕筋 ヒチヨ。さじと箸。◎失 取落した。◎良 マコトニ。◎以 ユエ。故

(一五七) 簡默沈靜。君子固宜然也。第當言而不言。與木偶奚擇。故君子有時。終日言而無口。過與不言同。要在心聲之感。人而已。

簡默 沈靜。君子固宜然也。第當言而不言。與木偶奚擇。故君子有時。終日言而無口。過與不言同。要在心聲之感。人而已。

◎簡默 ◎言葉數少くて要を得てゐること。◎沈靜 沈着で心静かであること。◎第 タダ。兎に角。◎木偶 木彫の形。◎口過 失言。◎心聲 言葉。

(一五八) 事親者。宜知醫人之良否。以托之。至親歿之後。己體亦匪輕。宜亦知醫人以自托。若己劣涉醫事。知醫方。卻怕或自誤。可慎。

事親者宜知醫人之良否以托之。至親歿之後已體亦匪輕宜亦知醫人以自托若已劣涉醫事知醫方卻怕或自誤可慎。

語釋 ◎劣ヤ、多少でも。◎涉ワタル。通じる。◎醫方 醫術。◎卻カヘツテ。◎怕オソラクヘ。

(46)

才

ワヅカニ

雅

モトヨリ

及

ト

(一五九) 華山始學畫也。家貧不能多給好紙。然天性敏乎畫。學之無幾。而其巧妙過于人。時年才十五六矣。

華山始學畫也。家貧不能多給好紙。然天性敏乎畫。學之無幾。而其巧妙過于人。時年才十五六矣。

語釋 ◎幾 イクバク。◎オワヅカニ。

(一六〇) 後漢東平憲王蒼。顯宗同母弟。少好經書。雅有智思。顯宗愛重之。拜驃騎將軍。位三公。上王既還國。後朝京師。上問王處家何等最樂。王言爲善最樂。驃騎將軍位三公。上王既還國。後朝京師。上問王處家何等最樂。王言爲善最樂。

樂。

後漢東平憲王蒼。顯宗同母弟。少好經書。雅有智思。顯宗愛重之。拜驃騎將軍。位三公。上王既還國。後朝京師。上問王處家何等最樂。王言爲善最樂。

語釋 ◎雅 モトヨリ。◎驃騎將軍 驃はヘウ。驍勇又は強い意。

(一六一) 吾行與路人間語以慰。但予以前途遼遠。心遽脚忙。不能與近郊遊。人差池逍遙。與一人言未了。又及前者語。如此數人之後。願初與言者。既在數里之後。不復可辨眉目也。

吾行與路人間語以慰。但予以前途遼遠。心遽脚忙。不能與近郊遊。人差池逍遙。與一人言未了。又及前者語。如此數人之後。願初與言者。既在數里之後。不復可辨眉目也。

語釋 ◎行 ヌク。◎差池 シチ。後になり先になること。◎及 ト。追ひつく意。

(47)

視

クラブ

數

セム

(一六二) 舟人笑振柁避之。輒掠巖角過。如此者數處。未嘗差絲毫。但經巖際。波激舟舞。飛沫撲人。衣袂盡濕。回視僕從。各握兩把汗。殆無人色。舟人甚間暇。從容吹煙而坐。視上流船併力挽上者。難易懸絕。

舟人笑振柁避之。輒掠巖角過。如此者數處。未嘗差絲毫。但經巖際。波激舟舞。飛沫撲人。衣袂盡濕。回視僕從。各握兩把汗。殆無人色。舟人甚間暇。從容吹煙而坐。視上流船併力挽上者。難易懸絕。

語釋 ○差 タガフ。○撲 ウツ。○衣袂 イベイ。○兩把 兩手。○吹煙 煙草を吹く。○視 クラブ。○挽 ヒク。

(一六三) 張耳陳餘皆魏名士。秦滅魏。懸金購兩人。兩人變姓名俱之陳。爲里監門。以自食。吏嘗以過笞陳餘。餘怒欲起。張耳躡之。使受笞。吏去。耳乃引餘之桑下。數之曰。始吾與公言何如。今見小辱而欲死一吏乎。(史記)(武藏高等)

張耳陳餘皆魏名士。秦滅魏。懸金購兩人。兩人變姓名俱之陳。爲里監門。以自食。吏嘗以過笞陳餘。餘怒欲起。張耳躡之。使受笞。吏去。耳乃引餘之桑下。數之曰。始吾與公言何如。今見小辱而欲死一吏乎。

語釋 ○張耳 大梁の人。○陳餘 同上。○懸金 懸賞。○之 ヌク。赴くこと。○里監門 里の門番。○自食 自活すること。○躡 フム。足をふむこと。○數 セム。罪過を一々數へ立ててしかりせめる。

(48)

賴

サイハヒニ

就

ナンナントス

(一六四) 徂徠年十四。從父往上總。後著書曰。予流落南總。十有二年。日與田夫野老偶處。賴有大學諺解一本。實先大父手澤。予獲此研究。用力之久。遂得不借講說。遍通羣書也。

徂徠年十四。從父往上總。後著書曰。予流落南總。十有二年。日與田夫野老偶處。賴有大學諺解一本。實先大父手澤。予獲此研究。用力之久。遂得不借講說。遍通羣書也。

◎流落 流浪に同じ。◎日ヒビ。◎田夫野老 田舎の農夫や老人。◎偶處 一緒に居る。◎顧サイハヒニ。幸に。◎先大父 亡父。◎手擇 シユタク。愛讀書。

(一六五) 苟此不能守。雖避之他處何益。及其無救而且窮也。將其創殘餓羸之餘。雖欲去。必不達。二公之賢其講之精矣。守一城捍天下。以千百就盡之卒。戰百萬日滋之師。蔽遮江淮。沮遏其勢。天下之不亡。其唯之功也。(唐宋八家文)

◎創殘餓羸 サウザンガルキ。傷つきそこなはれ餓えつかれること。◎餘 餘兵・殘兵。◎二公 張巡・許遠。◎講之精 緻密に考究しただらうの意。◎一城 睢陽城をいふ。◎捍 防禦すること。◎就 ナンナントス。次第に近接してくる意。◎日滋 ヒニマス。日毎に増加すること。◎蔽遮 ヘウシヤ。おほひさへぎる。◎江淮 楊子江と淮水。◎沮遏 ソアツ。はゞみとめる。

◎創殘餓羸 サウザンガルキ。傷つきそこなはれ餓えつかれること。◎餘 餘兵・殘兵。◎二公 張巡・許遠。◎講之精 緻密に考究しただらうの意。◎一城 睢陽城をいふ。◎捍 防禦すること。◎就 ナンナントス。次第に近接してくる意。◎日滋 ヒニマス。日毎に増加すること。◎蔽遮 ヘウシヤ。おほひさへぎる。◎江淮 楊子江と淮水。◎沮遏 ソアツ。はゞみとめる。

(49)

勅

イマシム

殆

アヤウシ

(一六六) 重盛願讓諸弟曰。今日之事。縱令公老耄發事。子等何不匡救。乃愆通之也。出勅將士曰。欲從公赴院者。見重盛剽首。然後行也。(日本外史)(海經・山高商)

重盛願讓諸弟曰。今日之事。縱令公老耄發事。子等何不匡救。乃愆通之也。出勅將士曰。欲從公赴院者。見重盛剽首。然後行也。

◎讓セム。責める。言葉で何故かくしたるぞと問ひ糺すこと。◎老耄 老年になつて耄碌すること。◎匡救 匡し救ふ。◎愆 愆シヨウヨウ。うながしすゝめる。◎救 イマシム。戒める。

(一六七) 土地雖廣。廢武則國破。邦境雖安。忘戰則民殆。弘風導俗。莫貴於文。布教訓。人莫善於學。文武二者。遞爲國用。(陸士)

土地雖廣。廢武則國破。邦境雖安。忘戰則民殆。弘風導俗。莫貴於文。布教訓。人莫善於學。文武二者。遞爲國用。

◎邦境 國土の境。◎殆 アヤウシ。安の反對。◎風 フウ。をしへ。教化。◎俗 ならはし。世の風習。

◎遞、テイス。たがひに。かはるがはる。

(50)

故

コトサラニ

爾

ソノ

(一六八) 徳川家康徒治駿河。擢板倉勝重爲市尹。勝重詢諸夫人。夫人諾焉。勝重喜。著禮衣。故拗袴而出。夫人自後呼曰。袴拗矣。勝重曰。此乃所以與夫人議也。口血未乾。乃負之。某何可就職。

徳川家康徒治駿河。擢板倉勝重爲市尹。勝重詢諸夫人。夫人諾焉。勝重喜。著禮衣。故拗袴而出。夫人自後呼曰。袴拗矣。勝重曰。此乃所以與夫人議也。口血未乾。乃負之。某何可就職。

◎徒、ウツス。◎市尹、シイン。町奉行。◎詢、ハカル。相談する。◎故、コトサラニ。◎拗、ネゲル。ネヂク。◎口血未乾、話してまだ間も無いのに。◎負、ソムク。

(一六九) 己卯之臘。肱棗得爾時寫山粉本數紙。戲以意接屬之。爲橫長一卷。又記其由。併錄所得詩九首。

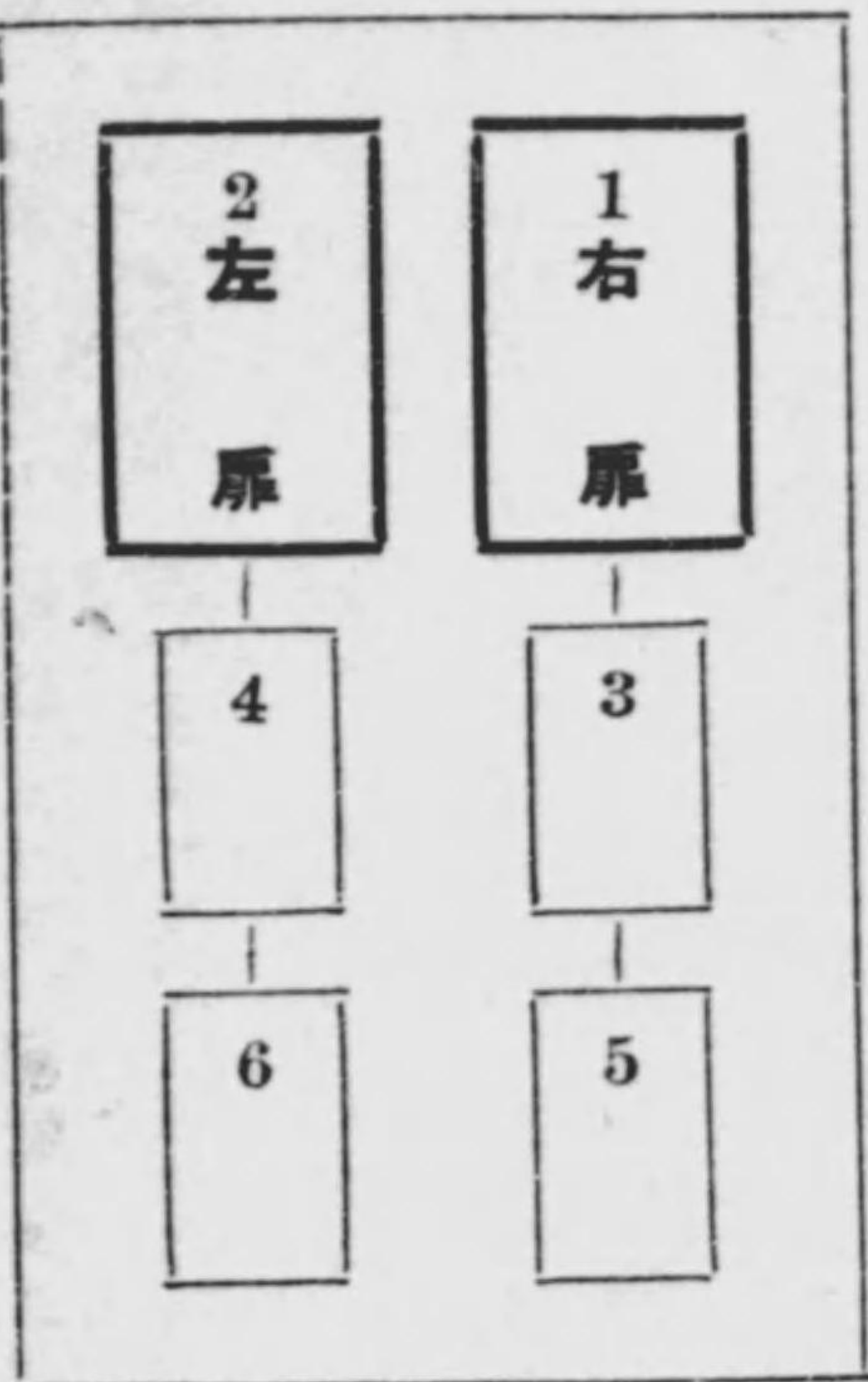
己卯之臘。肱棗得爾時寫山粉本數紙。戲以意接屬之。爲橫長一卷。又記其由。併錄所得詩九首。

◎臘、十二月。◎肱、ヒラク。◎棗、タク。ふくる。◎爾、ソノ。◎粉本、フンボン。こゝでは詩文のしたぎの意。◎以、意考へをもつて。

修辭法による白文練習

古來漢文に多く用ひられるものは四字句である。二字句・三字句に於ては、單に主語と述語とを具へるに過ぎないが、此の四字句になると、文の成文を具備して來るのである。四字句に次いで六字句が多く用ひられる。所謂四六駢儷體である。そして其の排列上に對偶法・漸層法・承遞法の三法式がある。この法式を會得して居れば白文は容易に讀み得られるのである。

對法偶(一)

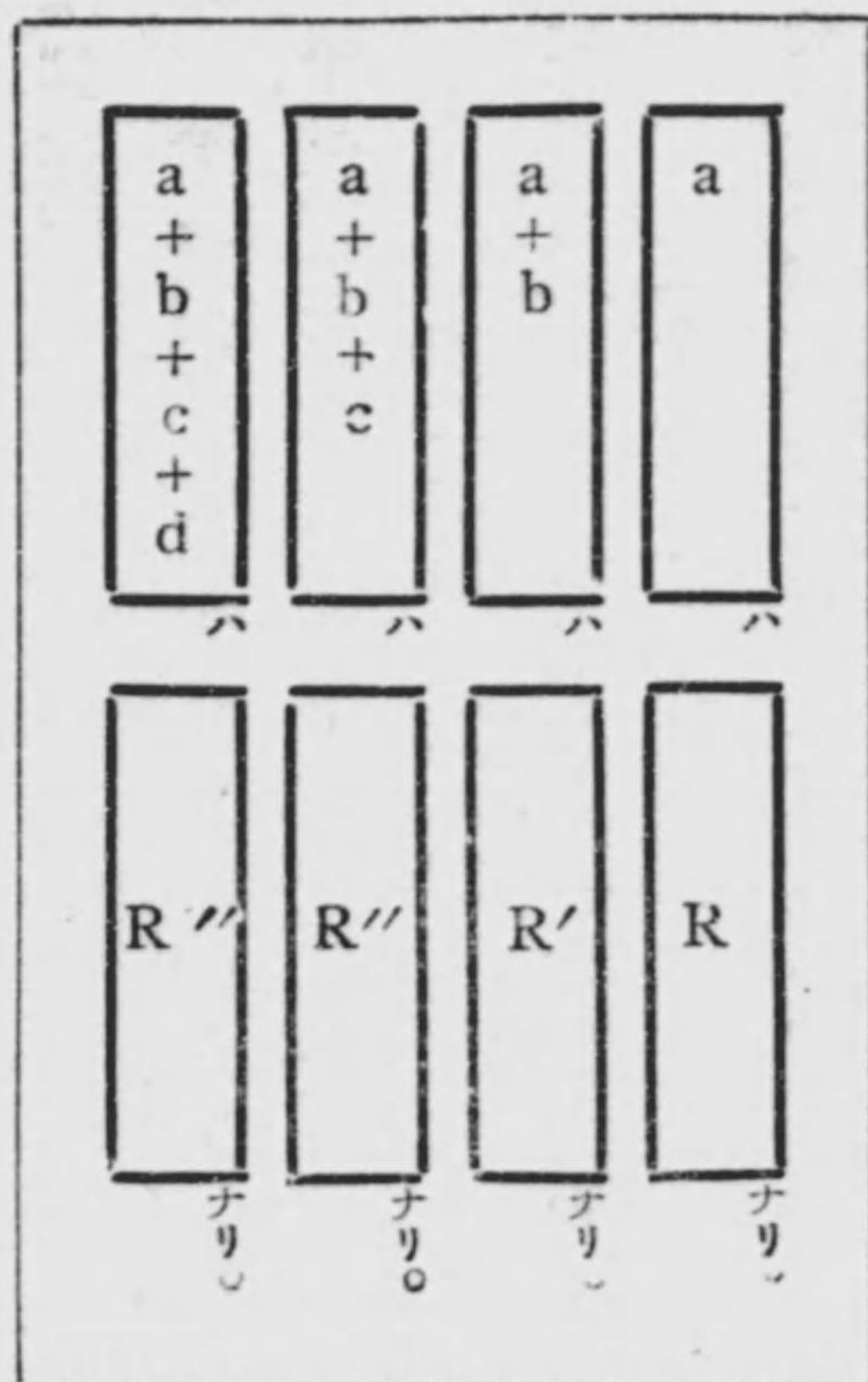


對偶法とは、雙關法とも、對語とも對句とも云ひ、門の兩扉のやうに、對立する二つの句を立て、之を本として、交互に承け繼いで文を進める法式で漢文の一特色である。文章として書き下す時には、1(右扉)・2(左扉)・3・4・5の順序で進んでゐるけれども、意味は1・3・5が一続きになり、また2・4・6が一続きとなるのである。この法式によつて書かれた文章を解釋する時にはその積りで掛らないと、一貫した意味を把握することは不可能である。

【例題】

(一) 同聲相應。同氣相求。水流濕。火就燥。雲從龍。風從虎。

法層漸(二)



(1) 同聲相應。 (2) 同氣相求。 (3) 水流濕。 (4) 火就燥。 (5) 雲從龍。 (6) 風從虎。
(二) 孟子曰。君子所以異於人者。以其存心也。君子以仁存心。以禮存心。仁者愛人。有禮者敬人。愛人者人恒愛之。敬人者人恒敬之。(孟子)

君子 (1) 以仁存心。 (2) 以禮存心。 (3) 仁者愛人。 (4) 有禮者敬人。 (5) 愛人者人恒愛之。 (6) 敬人者人恒敬之。

漸層法とは累層法とも云ひ、語句の配列を、淺より深に、弱より強に、輕より重に、漸次高調に導き、遂には讀者をして、感興の絶頂に導かうといふ筆法で、之亦漢文の特色である。そして對偶法に次いで多く用ひられる法式であるから大いに注意を要する。

【例題】

(一) 孟子曰。愛人。不親。反其仁。治人。不答。反其敬。行有不得者。皆反求諸己。其身正而天下歸之。(孟子)

愛人。不親。反其仁。
治人。不答。反其敬。
行有不得者。

皆反求諸己。其身正而天下歸之。

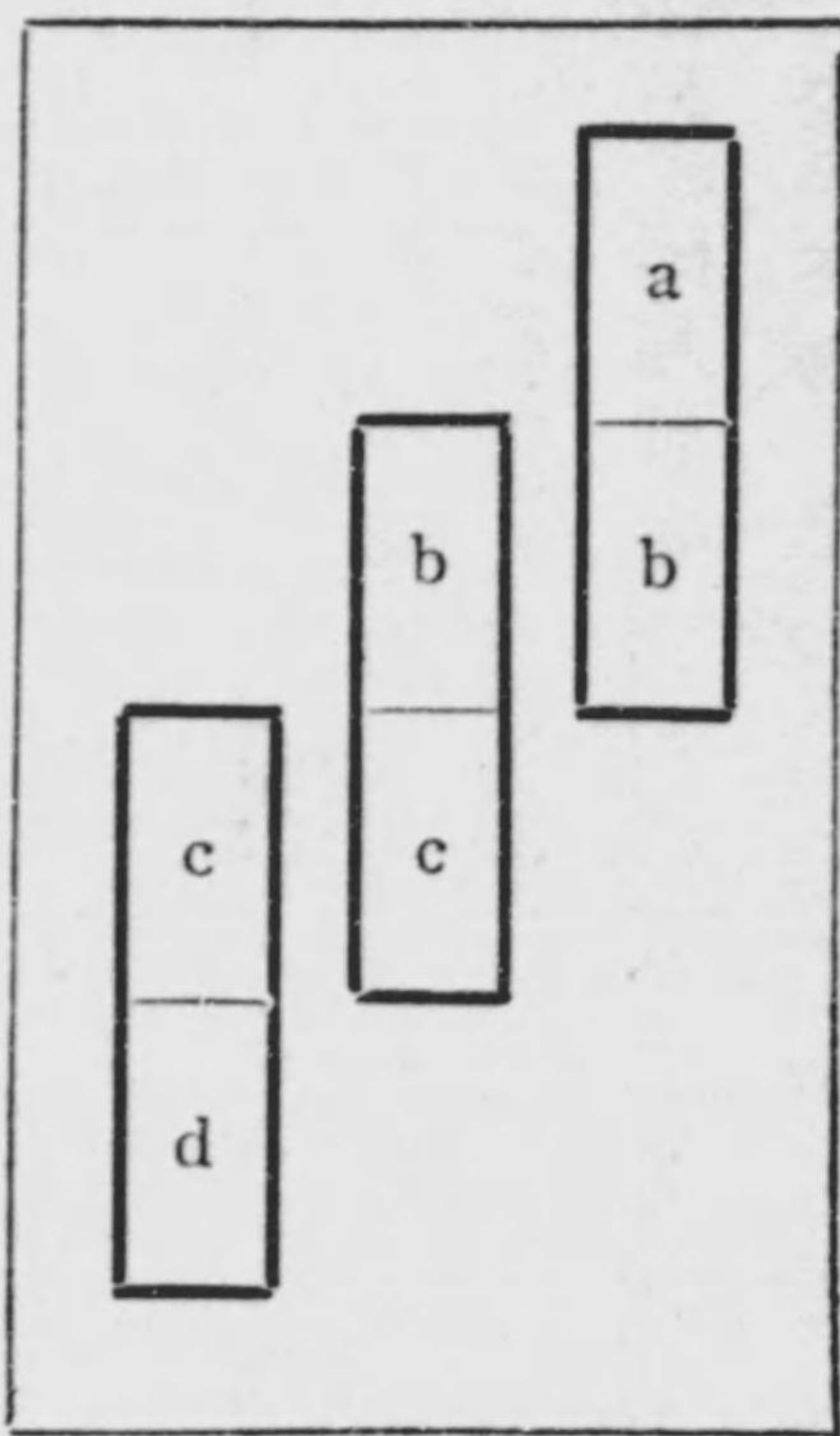
(二) 理到之言。人不得不服。然其言有所激。則不服。有所挾。則不服。有所便。則不服。凡理到而人不服。君子必自反。(言志錄)

理到之言。人不得不服。然其言

有所激。則不服。
有所強。則不服。
有所挾。則不服。
有所便。則不服。

凡理到而人不服。君子必自反。

法遞承(三)



前句の末にある語を次の句の頭に置く修飾法、換言すれば、後句の始めに於て、前句の結語を繰返す一種の反覆法で、連鎖法ともいはれてゐる。我が國では、尻取文句といふ名で知られてゐる。又語句の排列を淺より深に、弱より強に、輕より重に、漸層的筆法を取る事がある。承遞法も漢文の特色である。

【例題】

(一) 戰伐之道。勝於始者。將卒必驕。驕者怠。怠者或餽乎終。屬屬者。遂勝乎終。(言志四錄)

(1) 戰伐之道。勝於始者。
將卒必驕。
驕者怠。
怠者或餽乎終。

(2) 戰伐之道。餽於始者。

修辭法による公式と白文練習

將卒必憤。

憤者厲。

厲者遂勝乎終。

(二) 有德此有人。有人此有土。有土此有財。有財此有用。(大學)

有德此有人。

有人此有土。

有土此有財。

有財此有用。

練習

(一) 君子能爲可貴。不能使人必貴己。能爲可信。不能使人必信己。能爲可用。不能使人必用己。故君子恥不修。不恥見汗。恥不信。不恥不見信。恥不能。不恥不見用。

【五の字】

◎恥、不、修、身の修まらぬ事を恥ぢる意。◎汗、ハツカシメ。

君子能爲可貴。不能使人必貴己。能爲可信。不能使人必信己。能爲可用。不能使人必用己。

故君子恥、不、修、不、恥、見、汗、恥、不、信、不、恥、不、見、信、恥、不、能、不、恥、不、見、用。

(二) 賞不欲僭。刑不欲濫。賞僭則利及小人。刑濫則害及君子。若不幸而過。寧僭無濫。與其害善。不若利淫。(八高)

◎僭、セン。分に過ぎること。◎濫、みだりにすること。◎其、君子をさす。◎淫、食慾をいふ。

賞、不、欲、僭。刑、不、欲、濫。賞、僭、則、利、及、小、人。刑、濫、則、害、及、君、子。

若、不、幸、而、過、寧、僭、無、濫。

與其害善。不若利淫。

(三) 嗚呼。無父烏生。無君烏以爲生。而世之言曰。爲忠孝者。不兩全。夫豈然哉。君父人倫之大本。忠孝臣子之大節。豈其不相爲用。而反相害者乎。(五代史)(東京高等)

◎爲、生、生活すること。◎世、之言、世人のいふこと。◎兩、全、兩方面を完全につくすこと。◎人、倫、人の

道。◎大、節、大道。◎相、爲、兩方相俟つて事をする。

修辭法による公式と白文練習

嗚呼

無父鳥生。無君鳥以爲生。

而世之言曰爲忠孝者不兩全夫

豈然哉。君父人倫之大本。忠孝臣子之大節。豈其不相爲用而反相害者乎。

(四) 明於觀人。暗於觀己。此天下之公患也。見秋毫之末者。不能自見其睫。舉千鈞之重者。不能自舉其身。甚哉己之難觀也。因人之善見己之惡。因人之惡見己之善。觀孰切於此者乎。

(東萊博議)(東京高等・大阪高等・六高)

◎明 聰明の意。◎觀 觀察する。◎己 自分の言行一切を意味す。◎暗 暗愚。◎天下之公患 天下一般を通じての缺點。◎秋毫之末 獸類は秋になると毛の末が細くなるので、極めて微細なものの意。◎見 判知する。◎切 適切。

明於觀人。暗於觀己。此天下之公患也。

見秋毫之末者。不能自見其睫。舉千鈞之重者。不能自舉其身。甚哉己之難觀也。

人習 知以己觀己之難

不知以人觀己之易

因入之善見己之惡。因入之惡見己之善。觀孰切於此者乎。

(五) 無罪而得愆者。非常人也。身屈於一時。而名伸於後世。有罪而免愆者。奸佞人也。得志於一時。而名辱於後世。古謂天定而勝人。是也。(言志四錄)

◎愆 ケン。罪なり。咎なり。◎屈 恥辱を受ける。◎伸 ノブ。伸び張る。顯はれる。◎奸佞 カンネイ。わるがしこくて、ずるい。◎天定 天理の定まること。◎勝人 悪人は一時榮えても後には失脚すること。

無罪而得愆者。非常人也。身屈於一時。而名伸於後世。有罪而免愆者。奸佞人也。得志於一時。而名辱於後世。古謂天定而勝人。是也。

(六) 孟子謂齊宣王曰。一羽之不舉。爲不用力焉。輿薪之不見。爲不用明焉。百姓之不見保。爲不用恩焉。故王之不王。不爲也。非不能也。(孟子)

◎一羽 輕きものの喙。◎輿薪 ヨシン。車に積んだ薪。◎明 視力をいふ。◎百姓 一般人民。◎保ヤ

ス。愛護の意。◎恩めぐみ ◎王之不王 上の王は齊王といふ。下の王は活かせて徳を以て天下を治める君主の意。

孟子謂齊宣王 一羽之不舉。爲不用力焉。與薪之不見。爲不用明焉。百姓之不見保。爲不用恩焉。故王之不王。不爲也。非不能也。

(七) 孰謂少者歿。而長者存。强者夭。而病者全乎。嗚呼。其信然邪。其夢邪。其傳之非其真邪。信也。吾兄之盛德。而夭其嗣乎。汝之純明。而不克蒙其澤乎。少者强者而夭歿。長者衰者而存全乎。未可以爲信也。(韓愈)

◎少者、年少者。◎長者、年長者。◎夭、エウ。夭折。若死すること。◎全、無事生存する。◎信、マコト。眞に。◎吾兄、作者韓愈の兄會の事。◎其嗣、兄會の後嗣者老成。◎汝、老成をいふ。◎純明、純正聰明な事。◎克、能ふ。

孰謂 少者歿而長者存乎。嗚呼 其信然邪。其夢邪。其傳之非其真邪。信也。强者夭而病者全乎。

吾兄之盛德。而夭其嗣乎。汝之純明。而不克蒙其澤乎。少者强者而夭歿。長者衰者而存全乎。未可以爲信也。

(八) 均是武夫也。生於漢土文明之邦。而有不讀書。暗於大義者。生於本邦文運未開之時。而有讀書明於大義者。以余所聞徵之。如梁王彥章。我故伯耆守名和長年公。是也。(森田節齋)

均是武夫也(一) 生於漢土文明之邦。而有不讀書。暗於大義者。生於本邦文運未開之時。而有讀書明於大義者。如梁王彥章。我故伯耆守名和長年公。是也。

(九) 可以生。可以死。可以貴。可以賤。君子也。惡死而慕生。貪富貴而戚貧賤者。小人也。以死爲可惡。寧知死有善於生者乎。以貴爲可樂。寧知賤有安於貴者乎。(廣島高師) ◎可以生。可以死。生べき時には生き、死すべき時には死ぬる。◎可以貴。可以賤。貴かるべき時には貴く、賤しかるべき時には賤しく。(その場合に臨んで正しい處置を失はないこと) ◎戚、ウレフ。

可以生。可以死。可以貴。可以賤。君子也。
惡死而慕生。食富貴而戚貧賤。者小人也。

以死爲可惡。寧知死有善於生者乎。
以貴爲可樂。寧知賤有安於貴者乎。

(一〇) 雲始起也。浮浮焉如蒸黍。縷縷焉如吐絲。散而如綿出管。鎔而如銀在冶。椽樹而行。抱石而憩。徘徊顧望。躊躇不前。

◎黍 シヨ。きび。◎浮浮焉 むれ出るさま。◎縷縷 ルル。絲すぢの如く眞直に立つさま。◎椽 キヤウ。籠のやうなもの。◎冶 金銀を鎔すいもの。鑄型。◎縷 メグル。

雲始起也 浮浮焉如蒸黍 縷縷焉如吐絲
散而如綿出管 椽樹而行 徘徊
鎔而如銀在冶 抱石而憩 顧望 躊躇不前

(一一) 古之聖人其出人也遠矣。猶且從師問焉。今之衆人其去聖人也亦遠矣。而恥學於師。是故聖益聖。愚益愚。聖人之所以爲聖。愚人之所以爲愚。其皆出於此乎。

◎出人 普通の人に傑出する。◎猶且從師而問 「猶且」やはり。孔子が老子に道を問うた事などを指す。

す。

古之聖人其出人也遠矣。猶且從師而問焉。是故聖益聖。
今之衆人其去聖人也亦遠矣。而恥學於師。愚益愚。

聖人之所以爲聖 其皆出於此乎。
愚人之所以爲愚

(一二) 子曰。君子之事上也。進思盡忠。退思補過。將順其美。匡救其惡。故上下相親也。

子曰。君子之事上也 進思盡忠 退思補過 將順其美 匡救其惡 故上下相親也

(一三) 得意事多。失意事少。其人減智慮。可謂不幸矣。得意事多。失意事少。其人長智慮。可謂幸矣。

得意事多 失意事少 其人減智慮 可謂不幸
得意事多 失意事少 其人長智慮 可謂幸矣

(一四) 怠惰之冬日何其長也。勉強之夏日何其短也。長短在我不在日。有待之一年何其速也。久速在心不在年。

怠惰之冬日何其長也。

長短在我不在日。

勉強之夏日何其短也。

有_レ待_レ之一年何其久也。

不_レ待_レ之一年何其速也。

久速在心不在年。

(一五) 有常人之榮辱。有達人之榮辱。常人不知其為榮辱。

有_レ常人之榮辱。

有_レ達人之榮辱。

常人之榮辱。達人未嘗以為榮辱。

達人之榮辱。常人不知其為榮辱。

(一六) 夫國家之事。成於公而敗於私。盛乎顯而衰乎隱。故其興必取善於人。博問廣詢者也。其亡必陰秘壓抑。弄權飾非者也。考之各國史乘。其跡歷歷可徵矣。

夫國家之事。成_レ於公而敗_レ於私。

盛乎顯而衰乎隱。

故其興心取善於人。博問廣詢者也。

其亡必陰秘壓抑。弄權飾非者也。

考_レ之各國史乘。其跡歷歷可徵矣。

(一七) 諸葛武侯戒子書曰。君子之行。靜以修身。儉以養德。非澹泊無以明志。非寧靜無以廣才。非學無以成學。非才須學也。才須學也。非學無以廣才。非才須學也。

諸葛武侯戒子書曰。君子之行。

靜以修身。非澹泊無以明志。

儉以養德。非寧靜無以廣才。

夫學須靜也。

非學無以廣才。

非才須學也。

修辭法による公式と白文練習

惛慢則不能研精。一年與時馳。
險躁則不能理性。意與歲去。

遂成枯落。悲歎窮廬。將復何及也。

(一八) 有名者勿誇其名。宜自勗所以副名。承毀者勿避其毀。宜自求所以來毀。如是著功毀譽竝於我有益。

有名者勿誇其名。宜自勗所以副名。
承毀者勿避其毀。宜自求所以來毀。

如是著功毀譽竝於我有益。

(一九) 刃在頭目。斷指不願。病在腹心。灼膚不辭。彼豈以為不足愛而棄之哉。是必有不可棄者而奪其愛也。

刃在頭目。斷指不願。
病在腹心。灼膚不辭。

彼豈以為不足愛而棄之哉。是必有不可棄者而奪其愛也。

(二〇) 聞人之毀譽人。大抵聞其半可也。劉向謂譽人不增其義。則聞者不快於心。毀人不益其惡。則聽者不滿於耳。此言可謂盡人情矣。

聞人之毀譽人。大抵聞其半可也。
劉向謂譽人不增其義。則聞者不快於心。
毀人不益其惡。則聽者不滿於耳。

此言可謂盡人情矣。

(二一) 克念而後言。克念而後行。言行常當在于克念之後。一言一行須用心點檢。不可妄發動。是言寡尤行寡悔之道也。

克念而後言。
克念而後行。
言行常當在于克念之後。一言一行須用心點檢。

不可妄發動。是言寡尤行寡悔之道也。

(二二) 正人進退關於國家之泰否。實學興廢係於文運之隆污。蓋正人進則小人退。實學興則虛文廢。國家於是乎泰。文運於是乎隆。而其正人退實學廢者則反之。此古今之所同然也。

正人進退關於國家之泰否。
實學興廢係於文運之隆污。

蓋正人進則小人退。國家於是乎泰。實學興則虛文廢。文運於是乎隆。

而其正人退實學廢者則反之。此古今之所同然也。

(二三) 興利不若除害之爲利也。利興而害從焉。害除而利生焉。故善慮國家者。日求利而興之。興利者。如投薪救火。適足煽其燄。除害者。如疏水流之。刮其壅。塞其泄。因勢而導之。二者損益明矣。

興利不若除害之爲利也。

利興而害從焉。

害除而利生焉。

故善慮國家者。日求利而興之。

興利者。如投薪救火。適足煽其燄。

除害者。如疏水流之。

而其不善者。日求利而興之。刮其壅。塞其泄。因勢而導之。二者損益明矣。

(二四) 知人甚難。唯明而公者能知人。闇而私者不能知人。衆人智識闇昧。私意蔽固。

故闇者不能監察人之曲直邪正。而妄信人之毀譽欺僞。私者徇己之愛憎喜怒。而妄決人之賢否得失。雖欲不誤。而不可得也。

知人甚難。唯明而公者能知人。闇而私者不能知人。

衆人智識闇昧。私意蔽固。

故闇者不能監察人之曲直邪正。而妄信人之毀譽欺僞。私者徇己之愛憎喜怒。而妄決人之賢否得失。

雖欲不誤。而不可得也。

(二五) 衆人居富多忘貧。須節儉而勿奢侈。居貴多忘故舊。當存卹而不踈。歲長多忘父母。宜終身思慕。病愈多忘慎。須常思病苦時。凡自修者。當以不忘始爲誠。

衆人

居富多忘貧。須節儉而勿奢侈。居貴多忘故舊。當存卹而不踈。歲長多忘父母。宜終身思慕。病愈多忘慎。須常思病苦時。

凡自修者。當以不忘始爲誠。

(二六) 人之處世求活者。爲不欲於心之笑。吐不關於意之言。叩頭以拂人之髻。膝行以親人鼻息。暗夜求哀。白日傲人。奴不肯不忍爲也。

人之處世求活者。爲不欲於心之笑。叩頭以拂人之髻。膝行以親人鼻息。暗夜求哀。白日傲人。奴不肯不忍爲也。

(二七) 譽者或過其實。毀者或損其真。此衆人所毀譽之常情也。況小人奴婢之毀譽。或因私昵舊恩。或因有私怨宿懟。概皆自私意所發。而不足以爲信耳。大率聞毀譽而精察不迷眩者。可謂明也。

譽者或過其實。毀者或損其真。此衆人所毀譽之常情也。

況小人奴婢之毀譽。或因有私昵舊恩。或因有私怨宿懟。

概皆自私意所發。而不足以爲信耳。大率聞毀譽而精察不迷眩者。可謂明也。

(二八) 古之人。目短於自見。故以鏡觀面。智短於自知。故以道正己。道無明過之怨。目失鏡則無以正鬚眉。身失道則無以迷惑。

以緩己。董安于之心緩。故佩弦以自急。故以有餘補不足。以長續短。之謂明主。

古之人。目短於自見。故以鏡觀面。智短於自知。故以道正己。

故。鏡無見疵之罪。道無明過之怨。

目失鏡則無以正鬚眉。身失道則無以迷惑。

西門豹之性急。故佩韋以緩己。董安于之心緩。故佩弦以自急。

故。以有餘補不足。以長續短。之謂明主。

(二九) 人有出言至善。而或有議之者。人有舉事至當。而或有非之者。蓋衆心難一。衆口難齊。如此。君子之出言舉事。苟揆之吾心。稽之古訓。詢之賢者。於理無礙。則紛紛之言。皆不足卹。亦不必辯也。

人有出言至善而有議之者。
人有舉事至當而或有非之者。

蓋衆心難一。
衆口難齊。
如此。

君子之出言舉事苟稽之古訓。
揆之吾心。
詢之賢者。

於理無礙。則紛紛之言皆不足卹。亦不必辯也。

(三〇) 天下之事是中必有非非中必有是無全是焉無全非焉人之於人先是彼之所是非彼之所非然後徐而是我之所是非我之所非而欲張之終朝竟夕相壓相張嗷嗷然不能歸於一豈非惑乎。

天下之事 是中必有非。 無全是焉。
非中必有是。 無全非焉。

人之於人先 是彼所是 然後徐而 非彼所非 是我之所是 非我之所非 爭論庶乎息矣。
有爭氣者遽 是彼之所是而欲壓之 終朝 相壓。
嗷嗷然不能歸於一豈非惑乎。 是彼之所非而欲張之 竟夕 相張。

學習受驗 漢文終

修辭法による公式と白文練習

昭和八年四月五日印刷
昭和八年四月十日發行

不許複製



學習受驗

漢文

定價金九拾錢

著者 寶文館編輯部

印刷者兼
發行者 柏 佐一郎

發行者 大葉久吉

大阪市西區阿波堀通四丁目二十番地

東京市日本橋區室町四丁目五番地八

發行所

東京市日本橋區室町四(振替東京二八〇)
大阪市西區阿波堀通四(振替大阪四三)
神戸市元町通五丁目(振替大阪九五二)

寶文館

受學
習
學生參考叢書

次目次編册八十全

受學受學受學受學受學受學受學受學受學受學
習習習習習習習習習習習習習習習習

國本地理
外國地理
東西洋
算術
國史
西史
東史
代數

受學受學受學受學受學受學受學受學受學受學
習習習習習習習習習習習習習習習習

幾何
三角
生物
動物
植物
礦物
漢文

何角理學生物物物物文

送各料金八錢

各卷・挿圖豐富・三六判全一冊・定價金九拾錢

發行所 東京・大阪・神戸 寶文館

東京大阪 寶文館發行學生參考書略目錄

著者	書名	編別	定價	送料
神戸商業大學教授 竹原常太	スタンダード和英大辭典	上製普及版	八・五〇〇 六・〇〇〇	各三〇
フラング・ミュラー 小川忠藏	高等和文英譯模範		二・〇〇	一二
神戸商大講師 小川忠藏	和文英譯例解		・八〇	六
田中 豊	現代小英文學選		一・五〇	一〇
鈴木芳松	標準和文英譯法		・九〇	六
山口造酒 片口泰二郎	英文和譯の基礎		・九〇	六

府立東京高山宮允 等學校教授	J ^O B ^K 講演集 英詩十講		一・八〇	六
府立東京高山宮允 等學校教授	増訂現代英詩選集		二・〇〇	一二
三笠 白井文彦	英語單語と其の用例		一・八〇	一二
尾本憲	PRACTICAL EXERCISE PAD. FIRST SERIES		・三〇	六
同	PRACTICAL EXERCISE PAD. SECOND SERIES		・三〇	六
一矢慧	耳からの英語と 眼からの英語の競争		・七〇	八
文學士 坪内孝	註譯 徒然草	改訂十版	・七〇	八
同	註譯 雨月物語	改訂十版	・七〇	八

文學士 坪内孝	註譯 花月草紙	改訂十版	・七〇	八
吉田武夫	史記口譯		二・〇〇	一二
理學士 西澤勇志智 多田靜夫	増補 物理學精義		三・五〇	一六
理學博士 龜高德平監修 多田靜夫著	増補 化學精義		三・五〇	一六
多田靜夫	受驗第一 化學要義		・九五	一〇
同	受驗第一 物理學要義		・九五	一〇
岡田彌良 高桑良興	參考中等動物圖說		二・五〇	一〇
賀須井千	新 化學		二・五〇	一六

伊藤武夫	博物辭典		七〇〇	四五
森田幸次郎	平面幾何學智識の整理		一・五〇	八
土屋直人	整頓せる幾何の學習		二・〇〇	一二
三島壽之助 岸田軒造	實用幾何教科書		・八五	六
竺賢誠	考へられる幾何問題集		一・〇〇	六
森田幸次郎	代數學智識の整理		一・二〇	八
東利作	模範代數學問題集	改訂六版	・七五	八
林茂 名村源次郎	最新補習代數		一・二〇	六

